巻頭エッセイ

アマチュアからプロへの変換について

会長 坂井敏夫

昭和47年（西暦1972年）２月、冬季札幌オリンピック開会式２日前のIOC委員会で、アメリカ出身のブランデージ第６代会長はオーストリーのアルペン選手カールシュランツェ氏をプロ選手と断定して本大会の出場者から除名した。

オリンピック委員会規定では、オリンピック出場者はアマチュア選手に限定されていた。

坂井会長

この問題が後刻大きな問題となり、その年の改選期でブランデージ氏に代わって、アイルランド出身のキラーニン氏が第７代の会長となり、氏はオリンピック憲章からアマチュアの文言を削除して、プロ選手が参加できる規約に変更した。

第８代スペイン出身のサマランチ会長は、オリンピック大会の放送権を委員会が掌握して、放送権を莫大な価格で売却することで委員会の経済力を高め、さらに選手の対応処遇を大改編して、プロの資質を高めたことでオリンピック大会を最高の大会に仕上げた。

しかし、日本のスポーツ界をリードする日本体育協会や、その上部団体で総括する文部科学省の対処を考える時に私なりに不満であった。

なぜならば、オリンピック委員会改革後の対処について、何らの見解も発表しないまま従来通りの考えの元で、その後のオリンピックに選手を送り出しているように見受けられる。

本来ならば、委員会の大変革をうけて日本体育協会なり加盟各種目のスポーツ団体も、変革を考える必要があるのではないか。

・・・・・・・・・・・・・

㈶全日本スキー連盟競技部門のジャンプ選手30代後半の岡部選手は、国内大会に出場して優勝を７回も重ねていることや、若干年下の葛西選手も上位に入賞している。加えて長野オリンピックラージヒルで個人優勝と団体優勝した舟木選手は60歳になっても、ラージヒル飛躍台を飛びますよと放言していると北海道新聞に掲載されていた。彼らは無意識で飛んでいるかどうか分かりませんが、少なくとも、私はプロ根性の芽生えであり、プロへの第一歩と理解して期待をかけております。

・・・・・・・・・・・・・

私達スキー指導員も全国では46,839名を数え、全道では8,652名もの指導員が今年度全日本スキー連盟へ登録料を完納して会員になっているが、IOCの改革以後どれほどの変革がなされたか疑問だ。例えば、仮に指導員の46,000人がアマチュアからプロへ移籍して、プロスキー教師協会等と対等に統合を実行し、法人格を取得して低迷するスキー界を何とか復興させるべく努力をしてはどうかなどと考えるが、スキーの低迷だけを考えて立ち直りを努力しても空転するのではないか。

この時代、古きに得た指導員資格者も、ごく最近取得した指導員も共に相携えて、如何にして未曾有の低迷するスキー界を、活性化し、乗り切ることができるかが、全指導員の叡智にかかっている。

IOCがプロを認め30余年を経て、様々な時代背景と共に、オリンピックが開催されてきたことが脳裏に浮かぶと共に、スキー指導者の行く末を考える日々である。